2017.7.27 神

障害者殺傷事件から1年

意味なき命はない ③

「再生は地元で」の声

地域と密接に歩んだ歴史

相模原市の「津久井やまゆり園」は地元である緑区千木良をはじめ近隣の住民を多く雇用するなど、地域経済にとって重要な存在です。園の入居者や職員が、運動会や祭りといった地域の行事に参加する関係を築き、地域と密接に50年以上を歩んできました。

やまゆり園の再建をめぐって、神奈川県はいったん元の場所での再建を決めましたが、一部で反対の声もあり検討が続いています。今、住民たちからは「千木良で園の再生を」といった声が上がっています。

園内に交流の場

この声に、地域住民らでつくる「共に生きる社会を考える会」の共同代表で、園に36年勤務した太田顕さん（74）はこう話します。

「地域には、園生と交流のある人が多い。散歩中にあいさつしたり、一緒に畑作業をしたり。園内に交流の場があり手芸なども楽しみました」

同会が開いた会合や県の園再生に関する地域説明会で、多くの住民や地域に助けられた家族から「利用者の純真な心に励まされた」「これからも千木良で園を支えたい」という思いが語られました。同会は13日、園の再生に向けた要望書を県に提出しました。

提出に参加した山崎修さん（66）は以前、兄が同園に入居していました。「地域は温かく、園生は園で心穏やかな生活を送っていた」と振り返ります。

それだけに、事件によって園を離れ別の施設に移った入居者たちのことを心配します。

「生活が変わり、どうしたらいいか分からない園生はかなりいたはず。大きなストレスから、たまに自宅へ帰ると、ぐったりして起き上がれないと聞いている。園の再生・移転は、まっすぐ当人と向き合って決めてほしい」

千木良に住み、やまゆり園に約40年勤務した女性（73）は、「千木良では、園生と一緒に過ごす機会が多い。幼く純粋な時期から彼らと触れ合い育つことで、偏見などなく自然に接するようになる」と話します。

幸せを強く願う

女性は住民としてまた元職員として、入居者とその家族、職員たちの幸せを強く願っています。

「園が地域住民を雇い、行事も一緒にしてきたから強いつながりがあります。多くの保護者の方も『やっぱりここがいい』と思っているのではないでしょうか」

亡くなった入居者たちを知る障害福祉サービスに従事する女性は、入居者たちへの思いを、こう語りました。

「（彼らは）そこにいてくれるだけで良かった人たち。本当にそれだけで良かった」

（つづく）

「津久井やまゆり園」から家族に送られていた冊子＝山崎修さん提供（画像の一部を加工しました）